

# 過疎集落における地元商店が安寧な地域社会の構築に果たす役割 ～京都市 京北黒田地区「有おーらい黒田屋」を事例に～

国際航業株式会社 藤田有紀  
京都大学 安寧の都市ユニット 土井 勉  
京都大学 安寧の都市ユニット 孔 相権

## 1. 序論

### (1) 研究意義・目的

昭和 30 年代以降、高度経済成長を受けて農山村地域では人口減少とともに村落の自治機能が低下し、教育や医療、防災など地域における基礎的な生活条件の確保に支障をきたすようになり、産業の担い手不足などにより地域の生活機能が低下しつつある<sup>1)</sup>。一方で、平成 18 年に農林水産省が実施した限界集落代表者に対する定住意向調査結果<sup>2)</sup>では、集落に「住み続けるつもりである」という回答が 75%を占め、集落を出るつもりだと回答した者は 2割に満たない。

以上のように、集落での生活環境は厳しくなっているものの、集落での生活を維持したいと考える住民が多いことから、今後は個々の集落においてコミュニティを単位とした「積極的な撤退」<sup>3)</sup>を視野に入れながらも、よりよい地域社会の構築に向け、住民自身が相互に支えあう仕組みが求められものと考えられる。

本稿で取り上げる京都市右京区京北黒田地区は、大都市域にあるが、かつては林業主体の地域であり過疎集落という様相を呈している。しかしながら、2000 年に住民自らが日用品の購入が可能な商店「有おーらい黒田屋」を設立し、行政支援に依存することなく自立的に地域社会の構築に取り組んでいる。

本稿では、地域住民が自ら設立・運営している有おーらい黒田屋（以下、黒田屋と略す）に焦点を当て、地元商店が過疎地において安寧な地域社会の構築に果たす役割を明らかにすることを目的とする。なお、本稿での「安寧な地域社会」の定義は(2)を参照いただきたい。

### (2) 安寧な地域社会とは

京都大学安寧の都市ユニットがまとめた「安寧の都市論」<sup>4)</sup>では、安寧な都市を「まちづくりと健康づくり、及びこれらを融合した視点を横軸にとり、都市アメニティとクライシスマネジメントの取組みを縦軸にして、健康で快適に暮らし、活動を続けることができるまち」と定義している。

また、安寧の都市の実現には「住民をはじめ地域に関係する人たちが、コミュニケーションを通じて地域の進むべき方向性を決定し、豊かなコミュニティを実現する必要がある」としている。

そこで、本稿では「地域住民や地域関係者がコミュ

ニケーションを通じて、健康で快適な暮らしを共に構築するまち」と定義し、以下の分析を行う。

## 2. 研究対象地及び調査対象施設

### (1) 研究対象地の概要

京都市右京区京北黒田地区は京北地域内を流れる上桂川の最上流に位置し、人口329人、世帯数144世帯（2010年国勢調査）という京北地域の中でも比較的人口規模の小さな地区である。地区は、1955年に周辺町村（周山町、細野村、宇津村、山国村、弓削村）と合併し京北町となった後、1995年（平成17年）に京都市右京区に編入合併された（図-1）。

地区は6つの集落で構成されており、黒田郵便局や黒田駐在所、旧黒田小学校（現 研修センター）が立地する宮集落を中心に、灰屋集落、上黒田集落、下黒田集落、芹生集落、片波集落から構成される（図-2）。

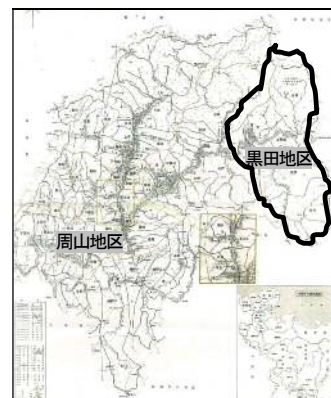


図-1 黒田地区位置図<sup>5)</sup>



図-2 黒田地区内集落位置図

(2) 調査対象施設の概要<sup>6)</sup>

黒田屋は宮集落に位置し、東側に喫茶コーナー、西側に商店を有する(図-3)。設立日は2000年7月16日であり、JAの広域合併に伴い廃止された支所で開業された。もともと、JA黒田支所は地元が土地を提供して設立されたという経緯があることから、JA廃止の意向を受け住民が商店の維持を町(当時、京北町)に要望し、町が商店を買取り、自治会に提供した。

設立にあたっては、黒田自治会の地元住民41名の会員が出資し、現在はこの中の役員10名<sup>7)</sup>によって運営されている。

扱う商品は、日用品や菓子、調味料、衣類などの他、地元農作物や加工商品、林産物や木工品などの特産品である(写真-2)。また、地元食材を使った高齢者のための給食事業や生活支援事業(後述)、片波自然観察コースの管理(府委託)や片波川源流域ガイドウォークの実施など、商業により地区高齢者を支えるとともに、地元資源を活用したエコツーリズムや地域活性化に向けた取り組みも実施している。

その他、地区住民によるバンド演奏や琴演奏が行われる音楽イベントや、地区住民が育てた野菜販売のイベント等、年に数回イベントも開催するなど、地域のにぎわいづくりや顔の見える関係づくりにも力を入れている。

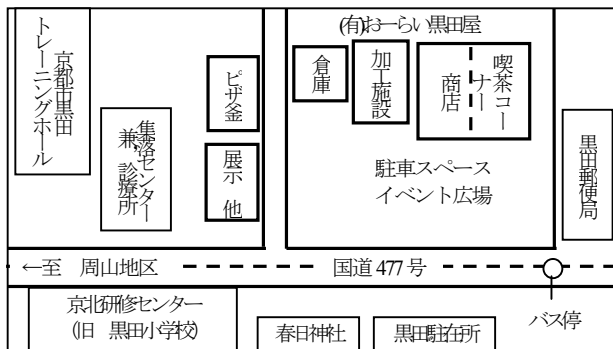


図-3 黒田屋構成及び周辺図



写真-1 黒田屋



写真-2 商店店内

3. 調査対象施設に対する調査手法及びその結果

(1) 調査実施概要

黒田屋が安寧な地域社会の構築に果たす役割を明らかにするため、黒田屋の前田芳子代表に対し、黒田屋の取り組み内容や運営工夫を中心としたヒアリング調査を実施した。調査日程及び内容を以下に挙げる。

表-1 ヒアリング調査実施概要<sup>①</sup>

平成24年 9月1日 <sup>②</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・黒田地区での生活利便性</li> <li>・黒田屋設立経緯</li> <li>・事業内容及び運営手法</li> <li>・いきいきふれあいサロンの取り組み内容</li> <li>・顧客の年齢層や居住地の特徴 等</li> </ul>
(同年) 12月8日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・黒田屋運営にあたっての工夫</li> <li>・コミュニケーション頻度や機会の提供状況</li> <li>・市や社会福祉協議会との関係性</li> <li>・顧客の移動手段 等</li> </ul>

(2) 調査結果

安寧な地域社会の構築に果たす黒田屋の役割に関する調査結果として、二点挙げる。

一点目は、生活支援事業(「田舎の便利屋」事業)開始のプロセスにみられる地元商店の役割である。生活支援事業は、家具の移動や家電修理、田畑への施肥などの要望に対して、黒田屋が地区内の事業者を斡旋する事業である。

この特徴は、遠慮から他者へ生活支援の依頼を躊躇する高齢者の声を地区住民の一人である店員が直接聞き、黒田屋役員と会員が地区内全体の課題として解決策を検討し、金銭を介する生活支援事業として成立させたという点である。ここから、黒田屋が黒田住民の生活相談窓口として存在していることが推察される。

二点目は、高齢者のコミュニケーションにみられる黒田屋の役割である。筆者が黒田屋を訪問した際、商店で菓子を購入し、喫茶コーナーで交流をはかる高齢者グループが確認できた(写真-3)。彼女らは度々黒田屋に集まり、交流をしているとのことである。前田代表によると、毎日黒田屋に来ては少量の日用品を購入し店番と雑談をして帰る高齢者もいるとのことであり、一部の高齢者にとって、黒田屋がコミュニケーションの場として機能していることが推察される。



写真-3 黒田屋で交流する高齢者

以上のように、黒田屋は地元住民が経営する商店であるため、顔の見える関係が構築されており、店番と顧客である高齢者の中で生活に対する課題の共有が図られる。また、黒田屋も顧客である高齢者とのコミュニケーションを通じて事業を検討し、相互に支えあう仕組みを構築していることが明らかとなった。

#### 4. 高齢者に対するアンケート調査及びその結果

##### (1) 高齢者に対する悉皆アンケート調査

地区内での買い物事情やコミュニケーション頻度、黒田屋の利用状況等を把握するため、地区高齢者に対するアンケート調査を実施した。

調査対象者は自治会名簿から抽出した65歳以上の高齢者(123名)とし、自治会を通じて対象者居住世帯に全戸配布した<sup>③</sup>。実施期間は2012年12月8日から22日までの15日間とし、黒田屋に設置した専用ボックスで回収した。また、いきいきふれあいサロン参加者にはサロン実施日にアンケート記入を依頼し、その場で回収した。

回答者の基本属性を表-2に示す。

表-2 回答者の属性

回答者数	123票中63票(回答率51.2%)
性別	男性39.7%, 女性54.0% (無回答6.3%)
居住地 <sup>④</sup>	上黒田集落17.5%, 下黒田集落7.9%, 宮集落73.0% (無回答1.6%)
年齢	65~69歳15.9%, 70~79歳36.5%, 80歳~89歳33.3%, それ以上6.3% (無回答0.0%)
世帯構成	65歳以上のみの世帯38.1%, 65歳以上の親とその子のみの世帯25.4%, 3世代世帯19.0% (無回答17.5%)

##### (2) 調査結果

全17設問のうち、本稿では本論に関わる設問のみを抽出し、結果を考察した。

##### (I) 買い物場所と黒田屋利用状況

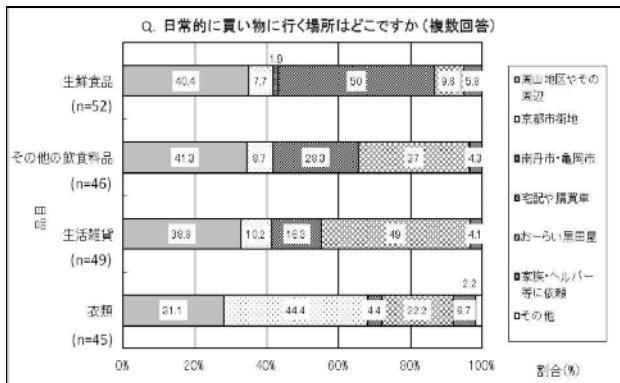


図-4 買い物場所 (品目別)

生鮮食品は、「宅配や購入車」での購入が50.0%と最も多く、次いで「周山地区やその周辺」が40.4%である。菓子などの乾物や調味料など、その他の飲食料品では、「周山地区やその周辺」が41.3%、次いで「おーらい黒田屋」が37.0%である。生活雑貨では、「おーらい黒田屋」が49.0%と最も多く、次いで「周山地区やその周辺」が38.8%である。衣類は「京都市街地」が44.4%と最も多く、次いで「周山地区やその周辺」が31.1%である。

ここから、「生鮮食品」においては黒田屋を利用する高齢者は少ない<sup>⑤</sup>ものの、「その他の飲食料品」では37.0%が、また「生活雑貨」では49.0%の方が利用していることが明らかとなった。また、利用頻度をみると、生活雑貨やその他飲食料品など、「日用品の購入」を目的に月1回以上来店する人は回答者の75.0%おり、黒田屋が地区の高齢者の買い物を支援していることが明らかとなった。

##### (II) 黒田屋利用目的及びその頻度

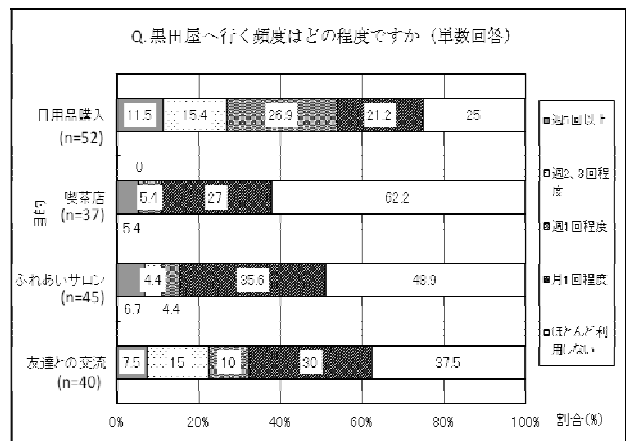


図-5 黒田屋の目的別来店頻度

月に1回以上、黒田屋を利用する者の割合は「日用品の購入」が75.0%、「喫茶コーナー」が37.8%、「ふれあいサロン」が51.1%、「友人との交流」が62.5%であった。

ここから回答者の半数以上が、月に一度は「日用品の購入」だけでなく「友人との交流」を目的に来店していることが明らかとなった。(図-5)。

#### 5. 考察

以上より、黒田屋は一部の地区高齢者にとって物品を購入する場のみならず、店員や友人とのコミュニケーションの場や、日常生活での不安や課題を相談する場として機能していることが明らかとなった。

つまり、京北黒田地区のような過疎集落においては、地元商店での「買い物」という行為自体が、「物資調

達」だけでなく、「外出機会」や「コミュニケーション機会」ともなると言える。

このような地元商店は、高齢者の“不安 3K”と言われる①経済的な不安②健康に対する不安③孤独に対する不安を和らげる効果があると期待できる。

また、これら地元商店の機能は個人の繋がりや顔の見える地元商店であるからこそ担えたと考えられ、大規模な商業施設では難しいと考えられる。

安寧な地域社会の構築には、住民同士のコミュニケーションが不可欠であることから、厳しい住環境において日常的に誰もがコミュニケーションをとることのできる地元商店が果たす役割は大きいと捉えられる。

また、行政が、高齢者に交流を促す福祉施設を新しく整備し、運営するよりも、黒田屋のような地元商店に役割を委ねる方が地域に根差した取組みができ、地元の資源を活用できるため経費も抑えられるだろう。

更に、住民は買い物を目的とするため、当人の好む時間での自発的な交流が可能である点で、来訪者の自由な選択に委ねられていると言える。

こうした黒田屋の生活支援事業や物品販売事業が、多少の金銭の介入を通して地区住民の日常生活をサポートし、住民同士のコミュニケーションを支えていることが明らかとなった。

## 6. 結論

本稿では、(有)おーらい黒田屋を事例に、地元商店が安寧な地域社会の構築に果たす役割を、ヒアリング調査やアンケート調査を通して、明らかにした。

黒田屋に見られるように、地元商店は住民と顔の見える関係性が構築されており、物品購入の場だけでなくコミュニケーションの場として機能していることが明らかとなった。また、黒田屋のように運営側が工夫することにより、住民の生活相談の場としての機能や課題解決の場としての機能も果たし得ることが明らかとなった。

これらの機能は、既存の住民間の関係性の上で成り立つものであり、地域資源も活用できるため、新たな福祉施設の建設による高齢者の交流の場の構築よりも安価で効果も高くなることが期待できる。

今後はこのような地元商店を安寧な地域社会の拠点として見直し、円滑な事業運営ができるよう行政や外部者が相談役としてサポートしていくことが求められる。

また、本稿では住民のつながりが強い過疎集落を対象に言及したが、住民同士の連帯感が希薄な都市部の高齢者においても経済的不安や健康不安、孤独に対する不安は共通の課題と考えられる。そのため、都市部においても、気軽に立ち寄りコミュニケーションをとることの可能な小規模商店がコミュニケーション拠点となりうる可能性もある。

本稿で取り上げた黒田屋の場合は、住民の出資によ

り設立された経緯があることから、住民自身が利用する意識が高いと推察される。このように、住民自身による設立を促すことで、より自分ごととして地域を捉え、商店を活用した地域内協力がスムーズにおこなわれる可能性があると考えられる。

今後は、過疎地における地元商店の果たす役割のより精緻な分析と水平展開についての知見の獲得、また都市部における小規模商店が果たす役割と期待される効果を検証し、安寧な地域社会の構築に向けたコミュニティ拠点としての可能性を模索することが期待される。

## 補注

- (1) その他、平成24年6月16日に店内視察、同年8月4日及び10月28日に黒田屋でのイベントにて高齢者の参加状況や交流の様子を観察した。
- (2) 黒田屋に集まっていた高齢者(80代)6名への黒田地区での生活に関するヒアリングも兼ねる。
- (3) 集落ごと自治会を通じて、通常の自治会配布物と合わせて配布した。片波集落は上黒田集落と合同で配布した(計36名)。また、灰屋集落は65歳以上の高齢者が7名いるが、入院等で集落に居住していない者(4名)と100歳超える者(1名)を除く2名に、黒田屋で配布した。なお、芹生集落は対象者がいない為、配布していない。
- (4) 上黒田集落(片波と合計36票中11票)、下黒田集落(31票中5票)、宮集落(54票中46票)、不明(1票)の回答を得た。黒田屋への徒歩移動が難しいと考えられる灰屋集落(2票)、片波集落(上黒田集落と合計36票)からの回答は得られなかった。(図2参照)
- (5) 黒田屋では、生鮮食品の取り扱い、地元産の農作物のみである。

## 参考・引用文献

- 1) 全国過疎地域自立促進連盟、「過疎市町村の特徴」<http://www.kaso-net.or.jp/kaso-about.htm>, (2013,1,30)
- 2) 林賢一・澤田守・佐藤宣子(2007)「平成18年度限界集落における集落機能の実態等に関する調査報告書—平成18年度農林水産省農林振興局委託—」, pp1-83, 財団法人農村開発企画委員会
- 3) 林直樹・齋藤晋・永松敦・東淳樹(2010)「第一章 過疎集落の現状,第二章 予想される国の将来」林直樹編『撤退の農村計画』, pp9-52, 学芸出版社
- 4) 京都大学大学院工学研究科・医学研究科(2011)「安寧の都市論」,安寧の都市研究 No.1, pp30-31, 京都大学大学院工学研究科・医学研究科安寧の都市ユニット
- 5) 京都市(2001,4)「京都府北桑田郡 行政区 京北 全図(平成十三年四月調整)」
- 6) (有)おーらい黒田屋提供資料(2012,12)「(有)おーらい黒田屋 地域で運営する手作りコンビニ」
- 7) おーらい黒田屋(2012,8)「毎度おおきに おーらい黒田屋報」